

七

ギリシヤの昔アリストテレスによつて推論式的論理の  
 形式が明しせられた。而してそれが今日及んでも我々の  
 思维の形式と考へて居る。形式論理と云ふものは何處  
 までも變らぬものかも知らぬが、知識は單に形式論理  
 によつて成立するのではない。アリストテレスの論理と云  
 へども、後人の考へる如く單に形式論理ではなかつた。  
 リシヤ的實在の論理であつた。ギリシヤの歴史的社會世界  
 の論理と云ひ得るであらう。中世以来、<sup>然るに</sup>中世以來、<sup>それは</sup>單に  
 形式的と考へた。中世哲學の實在はもはやギリシヤ

日本文化

（なすの外なかつた。）

四三三三

日本文化

かつた。

が姑く之を指さ。

のそれではなやデカルト子ついても云いべきものがあつた。  
 かの知れな<sup>免し角也</sup>いカントに至つて近代科学の論理と云ふもの  
 のが確立せられた<sup>と云ふことが出来る。</sup>ホリエの在パリステレス<sup>のポリス的</sup>の論理と對  
 して<sup>こゝそれは現代の</sup>科学的現<sup>い</sup>在の論理と云ひ得るのであつた。所謂對象認識  
 の論理として、今日の学界をも支配して居るのである。併し  
 ヘーゲルの論理と云ふものは、又之と異なつたものである。  
 であらう。それは歴史的世界の論理と云ふことが出来る。對  
 象認識とか價值批評とか云ふのではなく、國家社會<sup>社會</sup>の論理と云ふ  
 辯證法的<sup>辯證</sup>運動として、自然も人間も之に於て考へらるる<sup>歴史</sup>  
 的<sup>具体的</sup>形<sup>的</sup>の論理と云ひ得るのであつた。  
 近世、<sup>歴史</sup>の論理と云ふもの

歴史  
 すべて歴史的現實と

日本文化

ものの中心として考へられねばならぬと云ふに至つて、  
 深い深いヘーゲルの論理と云ふものが顧みられなければなら  
 ない所以である。西洋の偉大な論理と考へられ  
 るものは右の如きものであり、それが今日の世界的論  
 理そのものと考へられるものである。我々は学問的の物事を  
 考へるに限り、何処までもかゝる論理を無視するべきかゝらざ  
 りは云ふまでもない。私は西洋論理と云ふものは何処ま  
 でも物の論理といふ性格を脱し得ないかと思はれる。矛盾的自  
 己同一的世界の自己限定に於て、環境から主体への論理  
 であると思はれるのである。プリストテレスの論理は主語

様子は

×併し西洋論理的な物の見方考へ方と云ふものが唯一の  
 論理的な考へ方であるのであろうか。

■■■■

日本文

的論理であつた。カントの論理は對象認識の論理であつた。  
 之と反し、ヘーゲルの論理に至つては、人間の歴史的活動<sup>ま</sup>  
 であるものとして最も具體的と云はなければならぬ。  
 其の對象として之を包むと云ひ得るでもあらう。併し  
 それでも環境から主体へといふ立場を脱却しては為ない。  
 何処までも<sup>尚</sup>主体が<sup>外</sup>残されて居る。その<sup>は</sup>絶対否定<sup>が</sup>ない。主  
 体が残されて居るかぎり、それは<sup>遂</sup>主体から考へて居るので  
 ある。ヘーゲルの哲学が觀念的と云はれ、それは<sup>主</sup>観的と云は  
 れるが、<sup>が</sup>ヘーゲルの哲学が觀念的とも云はれる所以で  
 ある(再論私は多くの人がヘーゲルを斯く云ふ如く<sup>意味と</sup>然考へ

ま



リ、理論的に構成せられた宗教であつた。私は佛教に於ては、それ  
 自身の物の見方考へ方があると思ふ。佛教が印度佛教業が如  
 何にして然然なつたかは知らぬ。併し佛教即佛教印哲学の對  
 象は物ではなくして心であつたと思ふ。主語となつて述語  
 となつた実体が、アリストテレスの哲学の中心問題であ  
 つたのと同じ。印度哲学では我と云ふものが中心問題であ  
 った。佛教哲学の主張は無我而であつた。大乘佛教而に至つては、  
 有即無の絶對無であつた。かゝる哲学の論理は主語的論理  
 とか對象認識の論理とか云ふものであることはできない。  
 私はそれは矛盾的自己同一の心の論理であつたと思ふ。

論神教哲學者がそれまで自覚してゐたと云ふのは本  
 然我々の自己と云ふのは如何にして考へるものであ  
 りうか。意識統一とは如何なるものであるか。人は自己は一  
 瞬の前にも返つて二とができないと云ふ。自己を單に直線的  
 と考へる。併しそれでは自己と云ふものは考へられぬ。自  
 己は円環的でなければならぬ。過去と未来とが現在に  
 於て同時存在的であり、意識の野に於てあるものが、それ  
 が水に独立的であるか否か、私の意識現象として一であ  
 る。自己は何処までも對象として把握することはいかぬ。  
 自己は無であるが、すべて有るものは之によつて成立する

自來文也

のである。印度哲学者が自覚的にかゝる考へ方によつて世  
 界を考へたと云ふのでは無いが龍樹の中論に於ける時の  
 考の如きかゝる考を徹底せるものと云はざるを得ない。對  
 象論理の立場に立つ人は反省によつて自己を考へると云  
 ふ。それは環境から主体へと云ふことである。併し反省と云  
 ふは既に何等かの意味に於て思惟の對象的方向を否定  
 するものがなければならぬ。思惟對象的思惟の成立の根  
 定に於て之を否定するものがなければならぬ。對象的  
 思惟そのものから自己否定は出て来ない。人は對象的  
 物を考へることによつて逆して反省的の自己を考へると云

逆

■■■■

× 何かの物と自己との意識が命化して来るのである。

でもあうが、<sup>自己と對立する</sup>對象的物事を認識すると云ふ時、同時に自己と云ふものが知られておなければならぬ。原始的<sup>は物は</sup>物とも自己とも云ひ得ないものであう。特<sup>ボールトウィン</sup>には、<sup>イニヤ月位より</sup>とは子供は生<sup>物と人とを區別すると云ふ</sup>居る。私は今此書に於て此等<sup>の問題</sup>の詳論に入ることはできない。兎と角、従来の西洋論理に於ては、自己と云ふもの<sup>の</sup>考へる水の論理的形式と云ふものが明<sup>に</sup>せられておかない。我々<sup>自己</sup>はテガルトの Cogito Ergo Sum も、<sup>自己</sup>が<sup>実体的に</sup>考へる<sup>実体的に</sup>考へる<sup>水</sup>の時、それは自己と云ふものではなくしたのである。佛教は自己そのもの<sup>に</sup>徹底して、自己

三四三

日本文化

は無<sup>し</sup>て有<sup>る</sup>もの<sup>と</sup>考へた。主<sup>体</sup>の底<sup>に</sup>主<sup>体</sup>を否定<sup>し</sup>  
 て、<sup>その</sup>客<sup>観</sup>的<sup>な</sup>世<sup>界</sup>を<sup>見</sup>出<sup>した</sup>のである。心<sup>即</sup>是<sup>佛</sup>佛<sup>即</sup>是<sup>心</sup>  
 心<sup>と</sup>著<sup>しい</sup>考<sup>は</sup>斯<sup>く</sup>して成<sup>立</sup>した<sup>もの</sup>でな<sup>け</sup>れ<sup>ば</sup>な<sup>ら</sup>な<sup>い</sup>  
 佛<sup>教</sup>哲<sup>学</sup>を<sup>唯</sup>心<sup>論</sup>的<sup>と</sup>云<sup>つ</sup>ても、西<sup>洋</sup>哲<sup>学</sup>の<sup>範</sup>疇<sup>に</sup>當<sup>嵌</sup>  
 め<sup>て</sup>然<sup>考</sup>へ<sup>る</sup>のでは、未<sup>だ</sup>その<sup>眞</sup><sup>相</sup>を<sup>徹</sup>した<sup>もの</sup>では<sup>な</sup>い。そ  
 れは<sup>心</sup>理<sup>学</sup>的<sup>な</sup>又<sup>は</sup>客<sup>観</sup>的<sup>な</sup>理<sup>性</sup>的<sup>な</sup>世<sup>界</sup>を<sup>唯</sup>心<sup>と</sup>考<sup>へ</sup>る  
 の<sup>で</sup>は<sup>な</sup>か<sup>ら</sup>い。對<sup>象</sup>論<sup>理</sup>的<sup>な</sup>世<sup>界</sup>を<sup>唯</sup>心<sup>と</sup>考<sup>へ</sup>た<sup>の</sup>では  
 な<sup>い</sup>。佛<sup>教</sup>哲<sup>学</sup>は、我<sup>の</sup>意<sup>識</sup>我<sup>を</sup>越<sup>え</sup>て<sup>之</sup>を<sup>包</sup>む<sup>世</sup>界<sup>、</sup>即<sup>ち</sup>之<sup>に</sup>於<sup>て</sup>我  
 の<sup>意</sup>識<sup>が</sup>生<sup>成</sup>す<sup>る</sup>因<sup>果</sup>の<sup>世</sup>界<sup>を</sup>考<sup>へ</sup>た<sup>の</sup>である。唯  
 識<sup>論</sup>と<sup>云</sup>へ<sup>ば</sup>も、此<sup>の</sup>如<sup>き</sup>の<sup>で</sup>あ<sup>ら</sup>う。環<sup>境</sup>か<sup>ら</sup>主<sup>体</sup>へ<sup>の</sup>

三三三

×何処までも主体的なつもの主否定することはできない。それは逆に主体的なつもの主残して、そこから世界を見えて居るのである。此点に於ては、佛教哲学の考へ方の根柢を、却つてすべきを包む客観的世界の物の見方考へ方を求め得るとも云ひ

西洋哲学の考へ方は、何処までも主体を包むことはできない。×

佛教哲学の考へ方は、何処までも客観的を包むことはできない。×

併し佛教哲学では客観的は主観的である。自己と云ふものの中心

問題と云ふ環境的否定の問題なつた。所詮環境即客観世界

の問題は、強んど顧みられなかつた。印度文化は主体即世界

であつた。佛教哲学が主観的と考へられ、所以である。

右の如き考へ方、<sup>私的</sup>種は佛教哲学とはそれ独特の物の見方

考へ方があり、<sup>私的</sup>種はそれ矛盾的自己同一<sup>自身</sup>論の論理心の論

理と考へたいと思ふ。心即是佛佛即是心と云ふことは、心ま

存して心から世界を考へることではなく、世界から心ま考へ

日本文化

日本文化

うことでなければならぬ。それは世界を意識的に見ること  
 云ふことではない。龍樹の中論に於て既に（龍樹）所謂辯證法的な  
 うものと思はせうのであるが、それは西洋哲学の立場に於  
 て（の）考へられりし辯證法とは、根柢に於て異なつた所があつ  
 のではないかと思ふ。それが支那に於て、天台の一念三千の  
 世界観となり、華嚴（の）十即一切即十の事（事）無礙の  
 世界観に発展した。即一切一切即一と云ふ。佛教講理に於  
 て、（右の如く）意識を對象と  
 して、（心）心の論理を考へることに上つて生命を與へ  
 うことができたと思ふ。我國に於ての道元（禪師）の哲学の如きも、

日本文化

斯く佛教哲學的ニ考へることによつて、彼の身心脱落脱落  
 身心の宗教的體驗と外面的ニ結合するのではないかと思  
 小行と云ふ（フイも、）西洋哲學ニ於ての立場から考へるものとは自ら  
 意味が異なつた（たもの）東洋に於てはなすなすい。西洋哲學の立場から  
 は、佛教論理の立場と異なり、如きものは無造作ニ神秘的と考  
 へる（かも知れない）。併し我々の現實（世界）は自己と云ふものが入つて居  
 る存りなければならぬ。多即一即多の矛盾的自己同一  
 の論理は、現實（世界）の論理である。私は佛教論理が西洋論理より  
 完全だとは云はない。併し（西洋）の論理的形式に入らないか  
 と云つて、直に神秘的と云ふは云はれなすい。私は禪と云

日本文化

小ものま、一も二もなく神秘的と考へる人子對しても斯く  
 云はざるを得ない。西洋哲學に於て神秘哲學と考へられ  
 ものと禪とは柳、相類似すると考へられると共に、又全然  
 逆の立場に立つものと考へざるを得ない。禪は毫も科学的經  
 験と實相相容れなないものではない。(併し) 以上述べた如く  
 主張するものであるが、(之を為し、單に、従来の) 佛敎論理の如きもの  
の如きもの 返水と云ふのではない。唯、今日多くの佛敎學者自身が佛  
 敎哲學を西洋哲學の範疇に當嵌めて考へてゐるのではないかと  
 思ふのである。

此書に於て論理とは如何なるものかと云ふ如き問題に

三三三三

入ることはできないが、私は主体が環境を環境が主体をと環境とが矛盾的な内

的の相限定し、作られたものから作るものへといふ矛盾

的自己同一的世界の自己限定から知識が成立し、論理とは

か、この世界の自己限定の形式と考へるのである。作るもの

と作るものとの矛盾的自己同一に於て、知識の客観性

があるのである。我々は何処までも個物歴史的世界の個物としてと表現作用

的の物の世界を形成するが、それは逆の表現表現的の自己自身を形成する世界

的自己形成である。即ち私の所謂行為的直観的なる所

に、我客観的知識が成立するのである。我はオキツク的は非人

性モノトは何処までも自己の外の世界を映すモノトは自

日本文化

西田川

又意識的自己の問題を止まつて制作的自己の問題に至らなかつた。

己矛盾的に世界のヘルスベリティーの一観点であると言  
 小が如くである。何処までも<sup>眞</sup>客観的<sup>客</sup>な世界は何処までも并  
 我々の自己を否定すると共に、我々の自己を成立たしめる  
 世界即ち我々の自己を包む世界でなければならぬ。<sup>何処までも</sup>  
<sup>自己矛盾的なる</sup>意味<sup>を</sup>排して世界が矛盾的自身自己同一的な<sup>所</sup>なる<sup>が</sup>自  
 己自身十全なる客観的表現を有つのである。佛<sup>自己を世界に於て見</sup>教哲学の  
 立場は、かゝる世界の<sup>考へ</sup>考へ<sup>方</sup>考へ<sup>方</sup>ではあるが、何れも<sup>が</sup>何れ<sup>も</sup>  
 までも物を通すといふ方向に進まなかつた環境的<sup>に</sup>自己  
 自身を見つ、環境から主体へといふ方向に<sup>発展</sup>行ななかつた。宗  
 教哲学として意識的<sup>に</sup>自己の問題を止むべきと云ふことが

日本文化

それは已に得なかつた

■■■■

日本文化

できたであらう。科学的論理と云ふものが発展せなかつた  
 所以である。眞の矛盾的自己同一の眞の辯證法に至らな  
 かつた。私は印度の歴史的社会の成立を知り所ないが、  
 自然との間、主体と環境との間、相互否定の相対性、  
 主体が環境の中に没入したといふ如き社会生活が、  
 印度哲学の如き物の見方考へ方を形成したのではな  
 かつたかと思ふ。印度文化は意志と本行と水は生産的  
 活動を中心とした社会ではなかつたのであう。印度文化は  
 たものは意志とか行動とか云ふものであう。ヨーロッパ文  
 化と云ふものは、正と之と反対の立場に立つものであう。

四三三三

自然科学

併し科学的知識<sup>(的知識)</sup>と云へとも併時的形成を離れたい。主体的<sup>(形成)</sup>なものと云ふ如きものがある。今日物理的世界の如きものより然云ふことできる。矛盾的自己的<sup>(世界の自己限定として)</sup>な場所の論理によつて成立するのでない。極めて<sup>(単)</sup>な<sup>(位)</sup>のものは知らぬが私にはトポロギイ的な科学論と興味を有すものである。我國文化は主体即世界的な東洋文化でありながら<sup>(獨)</sup>理より事へと云つた如く、物に至るといふ方向にあるものと思ふ。作られたものから作るものへと云ふことは、事から事へと云ふことである。

歴史的主体の自己

歴史的世界の自己限定として

日本文学文化

ある事象は事實自身に對しては非論理的と考へ

ある、事事無礙と云ふことである。(事實が事實自身を限定す  
 と云ふことである) <sup>絶対</sup> 矛盾的自己同一的世界の自己限定  
 として、具体的論理的な事が理であり理が事であるのである  
 の。單なる相對對象論理の立場からは、それは非論理的と考へ  
 る水でもありうる。併しそれが我々が物となつて考へ物と  
 なつて行ふ立場である。而して我々の自己がそれこそ含み水  
 のかぎり、世界は自己自身に十全な客觀的表現を有するので  
 ある。科学もかゝる立場に於て成立するのである。

一カクキ

親鸞の自然法爾と云ふ如きことは、西洋の自然といふ如  
 (思想に於て考へる水)

■■■■

ことでは無い。それは衝動の王、<sup>勝手</sup>自然に振舞ふと云ふこと  
 ではない。<sup>それは所謂</sup>自然主義ではない。それは事<sub>レ</sub>當つて己を尽す  
 と云ふこと<sup>が包まれてゐる</sup>。なければならない。それは無限の努力が  
 包<sub>レ</sub>れてゐなければならぬ。唯<sup>唯</sup>なつが王、<sup>と</sup>云ふことでは  
 ない。<sup>伴</sup>自己の努力そのものが自己のものであると知  
 ことである。自ら然る<sub>レ</sub>めるものがある<sup>と云ふことである</sup>。  
 パウルが<sup>既に</sup>我生<sup>へ</sup>た<sub>レ</sub>る<sup>ありて生けるなり</sup>と云ふ  
 のと同様であらう。<sup>然</sup>それは外から自己を動かす<sup>でもな</sup>  
 く<sup>外</sup>から動かす<sup>でもなく</sup>、自己を包むものでなければな  
 らない。それは絶対矛盾的自己同一的<sup>所謂佛</sup>な道元の所謂佛<sup>は</sup>

日本文化

否、絶対矛盾的自己同一として自己がそれと終つたのである。



其の如き

形式作用の外なきに。私に自己を世界の中へ置くと言つ  
 たが、自己は固世界の中にあるのである。我々は今  
 己の眞に在る所を知るのである。自己の根源に徹す  
 ば、知るのである。其が我々の行為に知本報恩となつ  
 のである。親鸞の自然法爾と云ふのは、深く此意に徹したも  
 のでなけり。水はなすなす、矛盾的自己同一として皇道と離れ  
 ず相成らざるものなすなす。我々の自己が個物  
 其歴史的世界の個物として個別的自覚的な程か  
 右の如き  
 自覚に達せなすなす。その自覚は絶対の受働が即  
 絶対の能働であるのである。斯く云へば、  
 神秘的観

日本文化

穿つ

×すべての物の上と生命の躍動を感ずることなければなるない。

日本文化

と考へる水が、それは（かも知らぬ）、（地象論理的と推理するからである。）、~~推論~~、~~過ぎない~~、~~逆~~、~~は~~  
（絶対他力とは）、~~水は~~、~~現実即實在と云ふこと~~、~~で~~、~~な~~、~~け~~、~~れ~~、~~ば~~、~~な~~、~~ら~~、~~な~~、~~い~~、~~道~~、~~元~~、~~が~~、~~生~~  
 死ついで云ふ様子「此生死は即ち佛のお命なり、此れを厭  
 ひ棄てんとすれば即ち佛のお命を失はんとするなり。こ  
 れを留りて生死に着すれば、此れも佛のお命を失ふなり。佛  
 の有様を留むるなり。厭ふことなく慕ふことなき是時始め  
 て佛の心に入ら。ただし心を以て計ることな<sup>か</sup>れ、言葉を以  
 て言ふことなかれ、ただ吾身をも心をも、故ち忘れて、佛の家  
 に投入して、佛の方より修行はして、之に従ひて行く時  
 力を入らず、心をも費やさずして、生死を離れ佛となつと

四田川

ことではなければならない。支那の文化に於て天人合一の

自然と云ふのも、西洋に於て自然の考とは異なるため

の、なければならない。併しそれは人間が中心となつて

居る、天は人間化せしめた自然である。然るに親鸞の自然法

爾の自然と云ふのは、西洋論理の自然の考と逆の方向に、

人間を否定したものでなければならない。それは事を徹す

ると云ふことである。身心脱落脱落身心の立場あり、徳山

無事於心無心於事の立場である。

東洋文化は直観的と考へる。直観と云ふのも、色々の

考へ方があるであらう。併し我々が矛盾的自己同一的

日本文化

眞の直観とは



又見ると云ふことと働くと云ふこととの矛盾的自己同一の世思は、自ら相反する  
と思はれる。然し二つの文化形態と命をなせばなさない。而してその中より又種々  
なる形態が成立するのである。

種々なる形態と従つて  
心

2300)

主でも世界を表現するといふ立場に於て、表現は何れも  
概念的となすをければなさない。何れ主でも或決定せし  
水た現在から現在を越えて、過去未来が同時存在的の表現  
せし水ねばなさない。併し行為的直観の立場を離るれば、  
それは客観的知識ではなない。思惟的なるが直観は、眞の爲  
直観ではなく、~~客観的~~直観的なるが、思惟は眞の思惟ではなない。  
併し西洋文化は環境即世界として環境より主体へ、東洋文  
化は主体即世界として主体より環境へと考へる水は、如く、  
その間と對立的相違を認めることかでき、~~あり~~あり、~~併し~~併し、  
に於ては、フランス人が最も直観的と考へ得るあり、併し

日本文化

の物の見方考へ方が

西田川

日本文化

\*そのれも物事(即す)即ち直観と云ひ得るであらう。  
 \*之より又日本人の直観と云ひのは寧ろ事即すもの  
 と考へ得るであらう。全体即環境事から事へあ  
 る、事事無礙的である。例へば、日本人の特色特色を表すの詩を考へる水  
 の俳句と云ふ如きものは、最も特色を表して居ると思ふ。  
 世界を利権的一角から見たのである。そこには見ゆる物も  
 ない。歴史的世界に於ては物事は事であり、事は物である。  
~~物事の特色を有するものである。~~

即主體的  
環境